



明治学院大学機関リポジトリ  
<http://repository.meijigakuin.ac.jp/>

Title	児童養護施設職員の多文化パーソナリティが異文化間感受性に与える影響 文化的コンピテンス教育プログラムへの示唆
Author(s)	鈴木, ゆみ
Citation	
Issue Date	2017-09-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10723/3235">http://hdl.handle.net/10723/3235</a>
Rights	

明治学院大学 学長  
松原康雄殿

博士学位（課程博士）審査報告書

2017年7月12日  
審査委員長 阿部裕

下記の博士学位審査請求に関し、審査委員会では論文審査および口述試験を行った結果、全員一致で合格と判定しましたので、ここにご報告致します。

請求者氏名 鈴木ゆみ

論文名 児童養護施設職員の多文化パーソナリティが異文化間感受性に与える影響  
—文化的コンピテンス教育プログラムへの示唆—

審査委員会

委員長 阿部 裕（心理学部教授）

委員 金沢吉展（心理学部教授）

委員 伊藤 拓（心理学部教授）

委員 渋谷 恵（心理学部教授）

I 審査内容

鈴木ゆみ氏の課程博士学位請求論文「児童養護施設職員の多文化パーソナリティが異文化間感受性に与える影響—文化的コンピテンス教育プログラムへの示唆—」は A4 版 119 頁、図表 17 点、および付録（質問紙調査票 5 点）から構成される論文である。論文は、標準的な心理学的学術論文の形式に則っており、課程博士学位論文としての体裁が十分に整えられていると判定する。大学院心理学研究科では、本学学位規定ならびに心理学研究科内規に基づき、課程博士審査委員会を設置し、博士学位論文の審査を行った。

1. 論文の主旨

本論文は、日本の児童養護施設職員を通して、基礎的な文化的コンピテンスである、多文化パーソナリティが、文化的コンピテンスの中核概念である異文化間感受性にどのような影響を与えるのかを調べ、その結果を用いて文化的コンピテンスの教育プログラムへの示唆を得るものである。そこでまず、多文化パーソナリティを測るために、多文化パーソナリティ質問紙英語短縮版を翻訳し日本語版尺度の作成に取り組み、妥当性と信頼性が適切であること確認し、多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版を完成させた。次に、異文化間感受性尺度英語版を翻訳し、日本語版尺度の作成に取り組み、妥当性と信頼性が適切であること確認し、異文化間感受性尺度日本語版を完成させた。さらにこの2つの質問

紙と尺度、および独自に作成した質問紙を用いて、日本の児童養護施設職員にアンケート調査を行い、多文化パーソナリティが異文化間感受性に与える影響および異文化体験が異文化間感受性に与えている影響について検討し、いくつかの知見を得ている。そしてその知見から、文化的コンピテンスの教育プログラムへの示唆を行った。

## 2. 論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

【はじめに】	1
第Ⅰ部 問題の概観と本研究の目的, 意義, および構成	2
【第1章 問題の概観】	3
【第1節 児童養護施設と今日的課題】	3
【第2節 児童養護施設の外国にルーツのある子どもと心理支援のための文化的コンピテンス】	8
【第3節 文化的コンピテンスの概念化】	16
【第4節 文化的コンピテンスとしての多文化パーソナリティ】	21
【第5節 文化的コンピテンスとしての異文化間感受性】	26
【第2章 先行研究の問題点の整理と, 本研究の目的, 意義, 構成図】	33
【第1節 文化的コンピテンスに関する先行研究の問題点の整理】	33
【第2節 本研究の目的】	34
【第3節 本研究の意義】	34
【第4節 本研究の構成】	36
第Ⅱ部	37
児童養護施設職員の多文化パーソナリティが, 異文化間感受性に与える影響—文化的コンピテンス教育プログラムへの示唆—	37
【第3章 多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版作成の試み】	38
【第1節 多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版の妥当性と信頼性の検討 (研究1)】	38
1. 目的	38
2. 方法	38
3. 倫理的配慮	40
4. 結果	40
5. 考察	44
【第2節 多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版の再検査信頼性の検討(研究2)】	48
本章のまとめ	50

【第4章 異文化間感受性尺度日本語版作成の試み】 51

【第1節 異文化間感受性尺度日本語版の妥当性と信頼性の検討 (研究3)】

51

1. 目的 51
2. 方法 51
3. 倫理的配慮 53
4. 結果 53
5. 考察 57

【第2節 異文化間感受性尺度日本語版の再検査信頼性の検討 (研究4)】

63

本章のまとめ 64

【第5章 児童養護施設職員の多文化パーソナリティ, および, デモグラフィック・データや異文化体験が, 異文化間感受性に与える影響—文化的コンピテンス教育プログラムへの示唆—】 66

【第1節 児童養護施設職員の多文化パーソナリティが, 異文化間感受性に与える影響(研究5-1)】 66

1. 目的 66
2. 方法 66
3. 倫理的配慮 67
4. 結果 67
5. 考察 72

【第2節 児童養護施設職員のデモグラフィック・データ, および異文化体験が, 異文化間感受性に与える影響(研究5-2)】 78

1. 目的 78
2. 方法 78
3. 倫理的配慮 78
4. 結果 79
5. 考察 81

本章のまとめ 83

第Ⅲ部 87

総合的考察 87

【第6章 本研究から示唆される点】 88

1. 日本の児童養護施設における外国にルーツのある子どもを理解するための文化的視点 88
2. 多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版作成の意義と, 日本における概念化の特徴

3. 異文化間感受性尺度日本語版作成の意義と、日本における概念化の特徴	90
4. 日本の児童養護施設職員の異文化間感受性と多文化パーソナリティとの関連の特徴	90
5. 文化的コンピテンスの教育プログラムへの示唆	93
6. 本論文の限界と今後の課題	94
【おわりに—児童養護施設職員の文化的コンピテンスの向上に向けて—】	95
【引用文献】	97
謝辞	118
付録	120

### 3. 論文の概要

本論分は、第Ⅰ部 問題の概観と本研究の目的、意義、および構成と、第Ⅱ部 児童養護施設職員の多文化パーソナリティが異文化間感受性に与える影響—文化的コンピテンス教育プログラムへの示唆—に分かれており、Ⅰ部は1～2章、Ⅱ部は3～5章で構成されている。

第1章では、先行研究を概観しながら、児童養護施設および外国にルーツのある入所児童のおかれている日本の状況を説明し、その中で外国にルーツがあり文化移行した子どもはトラウマ体験が多く、特にそうした子どもにはこころのケアが必要であると述べている。そのためには、施設職員である対人援助職が文化的視点を持ち、文化を理解し対処する能力（文化的コンピテンス）を身につけるべきであるという。

そうした視点から、文化的コンピテンスの歴史的成立過程を論じ、文化的コンピテンスの5つのモデルを提示し、2つの要素間の関連を検討するのにふさわしい因果プロセスモデルを選択する。そして、基礎的な文化的コンピテンスとして位置づけられ、動的な文化的コンピテンスに影響を与える多文化パーソナリティと、感情面に焦点をあてたトレーニングや教育が可能な異文化間感受性という、2つの文化的コンピテンスを取り出し、両者の関係を見ることにより文化的コンピテンスの変化を明らかにする。

第2章では、第1章で必要とされた問題点を明らかにするために、以下に示す3つの研究、目的と意義について述べている。

1. 日本における、多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版、および異文化間感受性尺度日本語版の両構成概念の尺度化を通して、多文化パーソナリティと異文化間感受性の因子構造、および妥当性と信頼性を検討する(研究1, および2, 研究3, および4)

2. 文化的コンピテンスの基礎的要素である多文化パーソナリティが、異文化間感受性にどのような影響を与えているかを検討する。これら2つの構成概念の関連性を検討することによって、児童養護施設職員の文化的コンピテンスの状況を明らかにし、文化的コンピテンスの理論化に貢献する(研究5-1)

3. 異文化間感受性に影響を与えるとされている、多文化パーソナリティ以外の要因を探り、その影響を検討し(研究5-2)、2によって示されることと合わせて、文化的コンピテンスの教育プログラム開発への示唆を得る。

第3章では多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版を作成のために、大学生および大

大学院生 231 名 (男子 48 名, 女子 182 名, 不明 1 名, 平均年齢 20.89 歳,  $SD=1.84$ ) を対象としてアンケート調査を行った (研究 1)。原著者 (van Oudenhoven) に翻訳の許可を得たうえで多文化パーソナリティ質問紙短縮版を翻訳し、バックトランスレーションもを行い、留学経験のある大学院生とともに検討して日本語版とした。多文化パーソナリティ質問紙短縮版は、因子分析によって、「社会的イニシアチブ」「情緒的安定」「オープンマインドネス」「規律性」「文化的共感」の 5 因子構造が抽出された。本研究では、原版にて因子化されていた「柔軟性」は見いだされなかったが、その理由として、日本の多文化状況が影響した可能性が考えられた。基準関連妥当性を検討するために、日本語版心理的 well-being 尺度 43 項目と日本版 WLEIS 情動知能尺度を使用した。さらに再検査信頼性を検討するために、32 名の学生に、多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版を実施した (研究 2) ところ、十分な値を示したため、概ね、その一貫性と安定性が確認された。

第 4 章では、異文化間感受性尺度日本語版作成のために、大学生および大学院生 293 名 (男子 39 名, 女子 254 名, 平均年齢 19.7 歳,  $SD=1.26$ ) を対象としてアンケート調査を行った。(研究 3) 原著者 (Chen, G) に翻訳の許可を得たうえで、異文化間感受性尺度を翻訳し、バックトランスレーションもを行い、留学経験のある大学院生とともに検討して日本語版とした。因子分析の結果は、原版の因子構造とは若干異なり、「異文化への関与と配慮」, 「異文化とかかわる自信」「異文化への寛容性」「異文化への偏見の低さ」「文化的差異の尊重」の 5 因子構造が見いだされ、原版とは因子名がやや異なったことについては、日本人の特徴である、他者との協調や結びつきが重視され、自らを周囲に合わせるような対人関係が関連していると述べている。基準関連妥当性の検討のために用いられた、視点取得、自尊心、セルフ・モニタリングとの相関関係の結果から、概ね妥当性が支持された。信頼性について、3 つの下位尺度において、 $\alpha$  係数が .7 以上を示した。再検査信頼性を検討するために、32 名の学生に異文化間感受性尺度日本語版を実施したところ (研究 4), 十分な値を示したため、概ね、その一貫性と安定性が確認された。

第 5 章では児童養護連絡協議会を通して児童養護施設に多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版と、異文化間感受性尺度日本語版の配布を行った。回収率は約 52% で、児童養護施設職員 311 名 (男性 71 名, 女 240 名, 平均年齢 34.1 歳,  $SD=11.09$ ) が対象となった。

まず、多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版について、因子構造の妥当性を検証するために、確認的因子分析を行った。その結果、適合度について、一定水準以下であった ( $\chi^2(292)=717.888, p<.001, GFI=.846, AGFI=.815, RMSEA=.069, CFI=.794, AIC=835.888$ )。

そこで、モデルの適合度を改善するために、本データにおける共分散、および相関係数と、標準化係数 (パス係数) を検討した結果、モデル 10 (項目数 16) において、 $\chi^2(96)=168.987, p<.001, GFI=.940, AGFI=.915, RMSEA=.050, CFI=.945, AIC=248.987$  となり、適合度は一定の水準に達したと考えられた。しかし、項目数については、研究 1 の項目数より少なく、16 項目となった。その理由として、大学生・大学院生と児童養護施設職員との属性 (デモグラフィック) の違いが影響している可能性が示唆された。

異文化間感受性においては、確認的因子分析の結果、研究 2 と同様に 異文化への関与と配慮、異文化とかかわる自信、異文化への寛容性、異文化への偏見の低さ、文化的差異への尊重の 5 因子構造が妥当であると判断され、概ね、各種適合度指標も高かった ( $\chi^2(97)=193.865, p<.001, GFI=.931, AGFI=.903, RMSEA=.057, CFI=.913, AIC=271.865$ )。研究 3, 4, および本

結果から、異文化間感受性尺度日本語版は、安定した因子構造を有しており、異文化間感受性を測定するための有効な尺度であることが示された。

日本の児童養護施設職員の多文化パーソナリティと異文化間感受性の関連の特徴として次のことがあげられる。異文化間の相互作用を促進する力になる、オープンマインドネスと文化的共感が、異文化間感受性に影響を与えていることを示し、第2に、情緒的安定が、異文化接触時に生じる可能性のある心理的ストレスを低減している可能性を示唆し、第3に、異文化状況で、遂行能力のある社会的イニシアチブが、異文化接触における自信と関連すること、また、社会的イニシアチブは、異文化接触において、自らを周囲に合わせ態度として関連していることを示唆した。第4に、デモグラフィック・データ、および異文化体験から異文化間感受性への影響については、年代、海外旅行体験、外国語能力、外国人の友人がいることが指摘された。文化的コンピテンス教育プログラムへの示唆については、多文化パーソナリティの特性を補完できるようなプログラムへの提案がなされた。また、施設職員の異文化体験や年代によって文化的コンピテンスの教育プログラムの内容やトレーニングを工夫する必要があることが示唆された。

#### 4. 論文の評価

##### (1) 問題意識の斬新さ

本研究は、児童養護施設職員の文化的コンピテンスの獲得と向上のために、これまで全く取り上げられなかった、文化的コンピテンスの細部に注目した。基礎的で動的な多文化パーソナリティと、教育可能で、可変的な異文化間感受性という、2つの文化的コンピテンスを取り出し、両者の関係を見ることで文化的コンピテンスの変化を見ようという新しい試みである。これまでに、多文化パーソナリティと異文化間感受性の関連性について検討している論文はない。その問題意識の新鮮さと児童福祉・心理学領域における文化的貢献の意義は高く評価される。

##### (2) 研究方法の適切さの評価

本研究においては、日本における多文化パーソナリティ英語短縮版、および異文化間感受性英語版の両構成概念の尺度化にあたり、6回の質問紙調査を行い、さらに児童養護施設職員の多文化パーソナリティと異文化間感受性の関連性を見るために1回、計7回の質問紙調査を行っている。両尺度の探索的因子分析、両尺度の再検査信頼性、確認的因子分析を行っており、量的分析のみではあるが、丹念に分析を重ねており、本テーマの研究手法としては適切であると考えられる。

##### (3) 結果と考察の妥当性

多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版の作成では、因子分析を使って5因子を導き出し、再検査信頼性を行い、信頼性の確認を行なっている。また、妥当性を検討するために、日本語版心理的well-being尺度43項目と日本版WLEIS情動知能尺度を使用している。両者ともに、ほぼ正の相関が示されたことから、妥当性はほぼ担保されたと考えられる。異文化間感受性尺度日本語版の作成でも因子分析を行い、5因子を導き出し、再検査信頼性を行い、信頼性の確認を行っている。また、妥当性を検討するために、自尊感情尺度、セルフ・モニタリング尺度、視点取得尺度を用いている。異文化間感受性日本語版の下位

尺度得点と3つの尺度にそれぞれ相関関係がみられたことから、妥当性はほぼ担保されたと考えられる。

児童養護施設職員の多文化パーソナリティと異文化間感受性の関連性を見るため行われた調査では、それぞれに確認的因子分析を行っている。多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版の確認的因子分析では、一定水準以下であった。そのため、モデルの適合度を改善するために、本データにおける共分散、および相関係数と、標準化係数(パス係数)を検討し、一定水準の適合度を得た。しかし、項目数については16項目となった。

異文化間感受性日本語版においては、確認的因子分析の結果、5因子構造が妥当であると判断され、概ね、各種適合度指標も高かった。研究3,4,および本結果から、異文化間感受性尺度日本語版は、安定した因子構造を有しており、異文化間感受性を測定するための有効な尺度であることが示された。

日本の児童養護施設職員の多文化パーソナリティと異文化間感受性の関連の特徴として、第1に、異文化間の相互作用の促進力をもつオープンマインドネスと文化的共感が、異文化間感受性に影響を与えていることを示唆し、第2に、情緒的安定が、異文化接触時に生じる可能性のある心理的ストレスを低減し、また、異文化状況では情緒的に不安定になる傾向を示唆した。第3に社会的イニシアチブが、異文化とかわる際の自信に影響を与えていると共に、周囲の他者や状況に自らを合わせるような態度に影響を与えていることも示した。また、多文化パーソナリティ以外の異文化間感受性に影響を与えるものとして、デモグラフィック・データや異文化体験から、年代、海外旅行体験、外国語能力、外国人の友人がいることをあげている。

上記の結果から以下のことが言える。(1)多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版の作成については、妥当性、信頼性が担保されており、ほぼ完成されたといってよい。日本語版の尺度が作成されたことについては評価できるが、児童養護施設職員についての確認的因子分析で、適合度が悪かったことから、さまざまな集団にこの尺度を使用できるかどうかについては、今後新たな課題を残しており、再検討が必要であろう。(2)異文化間感受性尺度日本語版は、妥当性、信頼性が担保されており、また児童養護施設職員についての確認的因子分析でも、適合度が基準をほぼ満たしていたことから、日本語版の尺度作成は高い評価に値するであろう。(3)日本の児童養護施設職員の多文化パーソナリティと異文化間感受性の関連の特徴として、オープンマインドネス、文化的共感、情緒安定性、社会的イニシアチブが異文化間感受性に影響を与えていることを示した点は評価に値する。こうした示唆は、今後、種々な職種の文化的コンピテンスの向上に向けての働きかけの有効な手段となりえると考えられる。

#### (4) 本研究の臨床心理学的意義

複雑で多様な文化的コンピテンスの概念の中から、基礎的で安定的な文化的コンピテンスである多文化パーソナリティと、動的で文化的コンピテンスを高めるとされる異文化間感受性の2つを抽出し、その二つを通して文化的コンピテンスの概念を示し、より理解しやすくし、また実践に結びやすくしたことの、臨床心理学的意義は高いと思われる。

2つ目に、多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版と異文化間感受性尺度日本語版を作成したことにより、児童養護施設職員の多文化パーソナリティと異文化間感受性の関連



性を明らかにしただけでなく、今後、この2つの尺度が、日本人の文化コンピテンスの測定に利用され、文化コンピテンスを高める方法を提供しうることは、多文化に関わる現場の人たちに大いに有益である。また、児童福祉領域に限らず、医療機関、教育機関等における対人援助職においても、日本語による文化的コンピテンスに関する研究が可能となり、汎用性が高いという点で意義があると考えられる。

3 つ目は、多文化パーソナリティと異文化間感受性の関連や構造を明らかにしたことによって、多文化パーソナリティや異文化間感受性の視点から、文化コンピテンスを高める方法を臨床心理学の分野で取り入れることが可能になったこと、さらに、文化的コンピテンスを高めるための教育プログラム開発のための基礎的資料を得ることが可能となったことである。

#### (5) 本研究の限界と今後の課題

多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版については、原版の1因子である「柔軟性」がこの論文においては、ほぼ逆の「規律性」に変わっている。日本の文化特殊性からその変化の説明を試みているが、説得性に欠けるため、今後さらなる検討が必要であろう。

第2に、児童養護施設職員を対象にした確認的因子分析において、適合度が一定水準以下であった。適合度を一定水準の範囲にすると、5因子26項目が16項目に減少した。この10項目についての説明がなく、今後、この尺度を使うとすれば、大きな課題が残る。この10項目こそが、児童養護施設職員の多文化パーソナリティについての特徴を表している可能性があり、今後、綿密な検討が必要であろう。

第3に、多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版と異文化間感受性尺度日本語版との関連についてである。今後はさらに、この2つの概念の関連のモデル化を目指すことや、本研究で取り上げた2つの概念が、他の文化的コンピテンスの概念(気づきや知識、スキル等)とどのような関連があるのかを検討する必要がある。なぜなら、文化的コンピテンスは、多数の理論と要素、モデルからなる学問領域(discipline)であるためである。

第4に、文化的コンピテンス教育プログラムについて、本研究の結果から、異文化間感受性を高めるためのいくつかの示唆を得た。今後は、異文化間感受性尺度日本語版を用いて、実際に教育プログラムを実施し、異文化間感受性にどのような効果があるのかについて検討することが求められる。

## II 審査結果

2016年8月3日に開催された博士学位申請論文の予備審査会において博士学位申請論文提出資格を得て、2017年3月31日に鈴木氏が提出した論文に対して、各審査委員が慎重に検討して必要な修正・補足を促し、最終稿を査読した上で、2017年5月31日に審査委員ならびに心理学研究科博士後期課程臨床心理分野担当教員、計5名による口述試験が行われた。1時間にわたる論文概要の発表および質疑応答の結果、全員一致で鈴木氏の口述試験の合格を決定した。

2017年7月12日に鈴木氏の博士学位申請論文について心理学研究科委員会において審査を行った。鈴木氏の博士学位審査請求に対して全員一致で合格の承認を得た。